沖縄 交差するまなざし

人間の尊厳 消させぬ

「ガマフヤー」代表 具志堅隆松さん 下

沖縄本島では、戦没者の遺骨がいまも見つかる。そのためであろう沖縄戦を「生きている記憶」として捉え、過去に閉じ込めずにいる遺族は少なくない。遺骨をボランティアで発掘・収集する「ガマフヤー」(沖縄言葉。住民が逃げ込んだ自然洞窟「ガマ」を掘る人という意味)代表の具志堅隆松さん(69)=那覇市=は思う。人間は時の経過で遺骨となっても、人としての尊厳が失われていいはずはない。今後、どんな状況になろうとも、遺骨に頭を垂れて真摯に歴史に向き合うこと、人災である戦争に至らない方法を模索することこそが人道にかなうはずだ、と。遺骨に目を凝らして78年前の沖縄戦の実相を学び直し、遺族の胸の内にも耳を傾けて戦没者とその記憶を語り継ぎたい。具志堅さんの決意と行動は、非戦・平和への提案に向かう。

訴える具志堅隆松さん=写真はいずれも畑野京子さん撮影

4月24日。沖縄本島の南端、山城丘陵(糸満市)の原野に山梨県在住の原田裕美さん(56)がやって来た。この丘陵を訪れるのは昨年に続いて2回目で、沖縄戦で戦死した祖父の「最期の場所」を巡るのが目的だ。

原野には隆起した大小の石灰岩が点在し、ガジュマルが林立する。沖縄で伝説上の精霊・キジムナーが宿るとされる亜熱帯性の高木だ。野生のクワズイモやシコロも、それぞれの巨大な葉っぱを伸ばして道をふさぐ。その中を、案内を頼んだ具志堅さんが先導する。死者の魂を運ぶとされる蝶が現れ、ゆったりと舞い、そっと羽を休めた。かつて激しい艦砲射撃と火炎攻撃にさらされた場所が、しんとした自然に変わっている。

原田さんの祖父の死亡公報は、戦死年月日を「昭和20年(1945年)6月24日」とし、その場所は「沖縄において」とあった。死に至るまでの足取りは3年前になって、やっと次のように整理できた。

祖父は朝鮮総督府に勤務していたときに召集された。配属先は特設水上勤務(水動隊)第102中隊で、朝鮮人軍属を引率する曹長(戦死時に准尉)だった。水動隊は海上輸送の物資を陸揚げする港湾荷役のほか、陣地構築、弾薬や食糧の運搬などに従事した。44年7月、朝鮮を出発、福岡県を経由して奄美大島(鹿児島)で作業に従事。12月、沖縄本島に着いた。

慶良間諸島に送られた別の中隊もあったが、102中隊は沖縄本島南部、現在の八重瀬町に配置された。45年5月以降、戦局悪化で山城丘陵に後退した。戦闘の最終局面で、第62師団輜重隊の傘下に組み込まれたが、軍属たちは武器代わりのやりかしか持っていない。

祖父と同じ中隊に属し、戦火をくぐり抜けて戦後に生き残った「朝鮮人軍夫の金元栄さんは自著『朝鮮人軍夫の沖縄戦日記』で、次のように書いている。

〈竹やりを持ったわが隊員たちが、第一線地帯で行軍をしていた。後退の真っ最中で、武装した軍人がいるかと思えば、生きる場所を求めてさまよう民間人たち、(中略)同じ武装をした防(衛)召(集)の人たちが混じって、通行は混乱をきわめ、人の波は無秩序で、衝突とけんかが絶えない〉

軍民が混在する混沌とした現場一帯。そこに米軍が攻撃を仕掛けてきた。

防衛省防衛研究所が所蔵する第62師団の「山城付近戦闘経路要図」によると、6月22日(ママ)、米軍の火炎放射器で八守兵の大部分は焼死し、付近に在りし地方人(一般住民)の焼死する者亦其の数大なり〉(原文はカタカナ)。こうして中隊は壊滅した。

❶戦没者の魂を運んできたかのように舞っていた蝶が羽を休めた ❷骨片を指し示す具志堅さん(左)と手を合わせて見守る畑野さん=いずれも沖縄県糸満市で

しかし、原田さんの家族は戦後70年以上も、祖父が沖縄に向かう途中に船が撃沈されて海没したと思い込んでいた。入づての情報では徳之島から先の行方がつかめず、死亡公報が示した戦没地を、「沖縄近海」と解釈していた。水動隊の記録にしばらくたとり着けなかったことも手がかりが途切れた原因となった。この間も、原田さんは知りたかった。どんな兵士であったのか、軍属とどのように接していたのか。

親戚の記憶をたどり、記録の断片を重ねていくことで糸満の原野までの道筋がようやく見えてきた。具志堅さんを紹介され、昨年11月19日、親戚とともに原野を初めて訪れた。持参した焼酎をまいて霊魂を鎮めた。祖父の「最期の地」に立って安堵したのか、原田さんの心は落ち着いてきた。

2月11日、最南端の海岸、荒崎海岸の岩陰で乳幼児の乳歯、そのきょうだいと思われる2人の子どもの犬歯、前歯。3月10日、この海岸が見渡せる原野に隆起した石灰岩の下で頭蓋骨の一部と目の周辺の骨や肩甲骨の一部。3月12日、摩文仁の丘陵から海岸に下る斜面の巨岩に囲まれた狭い空間で、手の指の付け根の骨と足の指の骨。そして、今回の原田さんの訪問時。

多くの遺骨に接してきた具志堅さんだが、これまで米軍兵士の遺骨には出会ったことがない。米軍は自軍兵士の遺体や遺骨を戦場に放置したままにはしないのだ。「最大級の敬意と丁重さをもってその処理にあたる」からである(人骨研究の権威、埴原和郎さんの一言はヒトを語る」)。埴原さんは人の魂のかどうかさえわからない骨壺をもらうのと、国旗につつまれた立派な棺に入れられ、しかも身元確認の証拠書類がつけられた遺体を受け取るのと、遺族の気持ちはほとんど同じというえるのだろうか」とも指摘している。

遺骨に対するこうした認識と取り扱いの違い?それは、兵士や住民の命を軍がどう考えていたかに通底する。遺骨のそばでしばしば見つかる不発の手榴弾の意味を、具志堅さんが読み解くうちにわかったことである。

手榴弾は安全ピンを外して爆薬が作動する数秒間に敵に投げつけ、爆発させる武器である。当然、不発であっても、手榴弾は遺骨から離れた場所にあるはずだ。それがなぜ、遺骨の傍らにころがっているのか。

住民も軍属も兵士も「怒久の大義に生きよ」つまり、降伏するな、死ぬまで戦えという軍命に支配されていた。砲爆弾雨の中で殺されるか、自殺するしかなかった。遺骨のそばにあった不発の手榴弾は、自決を試みたが果たせなかった、そんな状況を伝える証拠だったのだ。

不発の手榴弾を傍らに捨てて、別の手榴弾で爆死した遺骨は、無残である。下半身はそろっていても、上半身は腹部から上の部分がない。頭蓋骨は粉々に割れ、脳面は砕け散ったのか、見つからない。

骨であっても厳かな心で接し、霊を慰めたい。それは、過剰な美化とは無縁のものだ。こうした具志堅さんの感覚は、遺族の気持ちに重なっている。

2年前から沖縄と東京の靖国神社前でハンガーストライキを行って「遺骨混じりの土砂を米軍の新基地建設に使うことは、戦没者をもう一度殺すことになります」と訴え、昨年から今年にかけ沖縄本島3カ所で遺族の気持ちを聴く公聴会を開いた。

さらに、次代に「遺骨の意味」を伝えるためにも、遺骨が未収集の沖縄本島南部の未開発緑地を県有化し、新たな非戦・平和発信の場とするよう沖縄県に提案している。国内唯一の戦跡国定公園を含むため、国にも要請する。財源は「ふるさと納税」の活用とすることも提案に盛り込んでいる。

沖縄戦の記憶の継承は、沖縄だけの課題ではない。戦没者とその遺族は全国、そして朝鮮半島など海外にまで広がっている。「人間の尊厳は時間の圏に消えるものではないはずです」。具志堅さんの目が、鋭くなる。

【答員編集委員(沖縄在住)・藤原健】

=次回は6月28日掲載